

83

令和7年4月8日

《最も心に響いた言葉特集》

明珠

龍泉院参禅会会報



(表紙写真)

かん しょう
喚 鐘

この鐘は、坐禅堂が建立される前から本堂で長く使われていたものです。ただの鐘ではなく、禅宗独特の「喚鐘」という鳴らし物です。喚鐘とは、師家の室で個人指導を受ける際に、侍者（行者）が師家の室外にあって学人を一人ずつ喚ぶ為に鳴らす鐘です。

平成の初め頃、故あって桐生市の仏具店「大仏堂」に行った際、現地の工芸作品店に、前年の日本工芸作品展で日本一になった作品があると聞き、早速その店に出向いて拝見したところ、その素晴らしさに見惚れてしまい、即決購入してきたものです。

因みにこの鐘がなぜ日本一になったかという理由は、次のとおりです。

- 一、特殊な用途
- 二、形状の美しさ
- 三、音響の妙鳴

私が購入しなかったならば、今頃はどこかの臨済宗か黄檗宗の名刹寺院に購入されて鳴らされていたことであまりしょう。

今ここ龍泉院の坐禅堂にあって、長くその働きを発揮してくれていることに、その縁の不思議さを改めて思います。

令和 7 年 1 月
東堂 椎名 宏雄

(撮影:小林裕次氏)

従容録に学ぶ(七三)

龍泉院東堂 椎名 宏雄

第二七則

法眼指簾

〔示衆〕

衆に示して云く、師多ければ脈乱る、法出づれば姦生ず。無病にて病を医すは、以て傷慈なりと雖も、條有れば條に攀る。何ぞ攀話あげるを妨げん。

〔本則〕

挙ぐ、法眼、手を以て簾を指す。「知らずと道うこと莫れ。見ずと道うこと莫れ」時に二僧有り。同じく去きて簾を巻く。「行を同じうして歩を同じうせず」眼云く、「一は是が一は失。」〔剣下〕に身を分かつ

今回は法眼さんが中心の機縁です。法眼は第一七則「法眼豪釐」の本則でも学びましたが、正しい名は法眼文益（八八五〜九五八）。唐末から五代にかけての禅匠で、洞山さんとは別系統の雪峯・玄沙・地藏と嗣承する地藏桂琛に嗣いだ方であり、法眼宗の開祖という

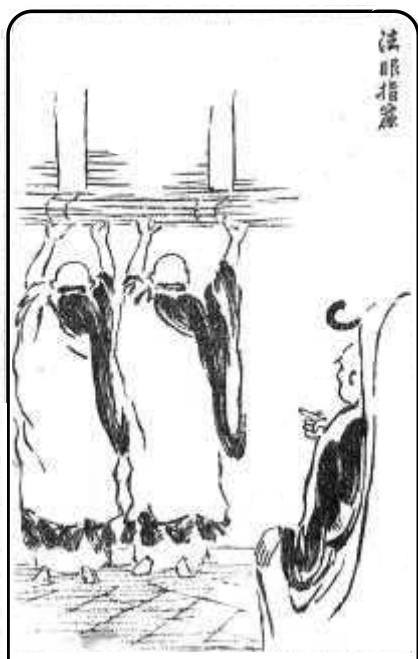
重要な地位にあります。『従容録』では雲門や趙州に次いで、洞山と同じくらしいの機縁を収めていて、注目すべき立場の人である。

この方は、若き頃は福州（福建省の省都）の長慶慧稜（雪峯の弟子）の道場に止まっていた時、暴風雨の為に足止めを食い、その地藏桂琛の道場に仮偶した縁によつて地藏に師事して豁然大悟した。その後、西方に游行し、臨川（江西省）に招かれて崇寿寺に居住するが、その開堂の日には一千人以上の者が参集したという。してみれば、東方に居た時、すでに仏教的学問と禅の修行が人並でなく進んでいて、その名が知れ渡っていたと思われる。特に鋭利聡明な大徳であったのだろう。

当時、江南の国王であった銭氏はこれを聞き知って、彼を東方に引き戻し、金陵（南京）の報恩院や清凉院という大利に招き、布教教化に邁進させた。法眼はよくそれに応えて化導に尽力した。その様態は伝存する語録や著述によつて知られるが、特に『宗門十規論』一卷は、初めて禅門五家の各宗風を論述した書として、短編ながら注目される撰述である。なお、この時代の「宗

門」とは「禅門」の意味であり、この書はわが江戸期に何度も刊行され、その注釈書もある。

因みに、法眼は宗門（禅門）のみならず法華や華嚴の教学にも通暁していたので、禅者としては貴重な人物であり、この人に対する総合的な考察・検討が期待されていたが、二〇二四年九月、新潟大学の土屋太祐先生によつて『法眼』という専著が刊行された。すばらしい内容であり、今後話題になるのは必定。さて、右に挙げた「示衆」と「本則」の要旨・難語を学びましょう。まず要旨から。複数の医者診察では病いは却つて重くなり、法令が複雑になれば違反者も増える。こうした過度の慈悲をどうする？



「示衆」の要旨はこんなところ。私達は坐禅の理念に「自未得度先度他」と掲げた以上、これは難解だからお手上げだ、では済まないのです。でも、考える前に右の典故を調べておきます。「法出づれば姦生ず」は、『前漢書』董仲舒の伝記にある記事。「條有れば條に攀る」は、『碧巖録』の第一〇則の垂示に見える語句です。『碧巖録』は『従容録』より約百年古いですが、いくら悠久の大陸とはいえ、もう資料になりますし、事実沢山使われております。では次に「本則」の難語。

「義皇世」の義皇は伝説上の帝王で理想政治が行われたと。今の世からは羨ましい帝王ですね。「潜龍淵に在り」は『周易』の語で龍が淵に潜んでいれば安穩。胡蘆はふくべ。鑿は石切りのノミ。この本則の核心は一得一失にありいずれも肯定しています。だから大塚老師の挿絵でも両僧が仲良く揃って簾を巻上げた図に、「人はただ何もいはずにいよ簾そのよしあしは外に見え透く」と威儀即仏法、作法は宗旨が重要なことを表明されています。私は物を置き忘れた時と拾った時があります。この正反対の行為でいずれも大きな精神的鍛練をいただきました。

拾った体験は、まだ大学まで現役で通学し

ていた時、何かで帰路が遅くなり、帰りの常磐線電車も九時近くになっていました。眠い目を上げると、左隣りに掛けていたOL風の女性が、急に立ち上がって急ぎ足で降りました。亀有駅でした。ヒョイと見るとハンドバックを置き忘れて行ったのです。あれと思っただが、どうする事もできません。そのうち、段々に皆が下車し、遂に私だけになりました。ヤレ困ったと思いました。柏駅で降りて遺失物係に渡した処、住所・電話番号といわれ名刺を置いてきました。バックにはかなりの金銭と定期券も入っていました。

一時ごろ、本人からの電話があり、バックが無事に戻った事の礼と何がしかの謝礼をというのを遮って、「今度あなたが拾い物をしたらすぐ返してあげて下さい」と言って一件落着となりました。果たしてそうしたか否かは関与するところではありません。

次に置き忘れ。明治末に刊行された『大日本続蔵経』という一切経は、和本仕立てで軽量です。で、これを図書館から借用して研究用に供し、朝数冊をトランクに入れて電車に乗りました。途中で混雑していたのでウツカリ網棚に上げたのが運のつき、降りるべき駅で置き忘れ、二子玉川駅まで行き、乗車賃を

沢山払いました。でも、金銭だけで利用者にご迷惑を掛けなかったのは仏天のご加護で勿怪の幸いだっと思えます。

最後に宏智さんの頌古を採っておきます。

〔頌古〕

頌に云く、松は直く棘は曲り、鶴は長く鳬は短し。〔動著することを得ず〕義皇の世の人俱に治乱を忘る。〔胡蘆も提鑿も肥ゆることを得たり〕其の安や潜龍が淵に在り、〔仏眼で覷れども見えず〕其の逸や翔鳥は絆を脱す。〔研頭望めども及ばず〕何んともする無し。祖禰西来す。〔上梁が正しからざれば〕裏許得失相い半ばす。〔下柱も参差る〕蓬は風に随つて空に転き、〔業識茫茫として本の拠るべき無し〕缸は流れを截つて岸に到る。〔順水に帆を張るも、快便に逢い難し〕箇の中の靈利の衲僧、〔街に罵る醉漢は、誰か敢えて承頭せん〕清涼の手段を看取れよ。〔我が這裏にも也た有り只だ是れ其の人に遇うこと罕れなり〕

形体は88666665566で、形式に入らない異体で、例により古典を引いた難詩です。「義皇世の人」は伝説上の帝王で理想政治を行った人。「潜龍・・・」は『周易』の語で本則に出ました。

第七一則 翠巖眉毛

〔示衆〕

衆に示して云く、血を含んで人に嘔きつけ、自から其の口を汚す。杯を食つて一世人の債を償う。紙を売ること三年もやり、鬼銭すら欠く。万松は諸人の為に請益す。還い擔干計処有りや？

〔本則〕

挙ぐ、翠巖が夏末まで衆に示して云く、「猶お少なきを嫌うこと有り」「夏以來、兄弟の為に説話せり。『自ら家醜を揚た』看よ！翠巖が眉毛は在りや？」「口に疹することは害わぬ」保福云く、「賊と作るごとき人は心は虚るなり。」「也た是れ火裏の人なり」長慶云く、「生たり。」「雪上に霜を加う」雲門云く、「關だ。」「街を攔り巷を截ぬ」

今回は雪峰義存の法嗣である翠巖令參という方が中心の機縁です。この方は生没年こそ未詳ですが、明州（浙江省）の翠巖山の道場で化道を張りました。呉越の王銭はこれを大いに讃仰して杭州の龍冊寺に招いて居住させ

紫衣と大師号を下賜しています。この本則に登場する保福・長慶・慧稜・雲門文偃の三者はいずれも兄弟弟子ですから、この一則では四兄弟のそろい踏みという珍しい機縁ですが、やはり明州天童山の宏智さんが撰んだ『從容録』の扱いからみると、この令參和尚が最も古參の兄貴分であつたと考えられます。では、右の「示衆」から見て行きましょう。

血を人に嘔きかけるには自らの口を汚すのが先決。酒豪に酒を勧めるには自腹覚悟、紙銭売り三年で自分の分がなくなる、私（万松）の示衆等々は、皆計算が合うと思うかな。

ほぼこうした意味で、私たちの参禪の一大理念であります「自未得度先度他」は一体成立するかな、ということと類似していますね。「売紙三年……」は、唐臨の『冥報記』にある詩。では次に「本則」の梗概です。

夏安居末に翠巖が大眾に「私は皆さんに説法してきしたが、間違いを云つて眉が落ちたかどうか」と聞いたら、保福は「佞法の方です」

と讃め、長慶は「眉はちゃんと生えています」とこれも讃めたが、雲門だけは「難問だ」と述べた。

おおむねはこんなところですが、この雲門の答えをどう解釈するかが日本の臨済禪では問題なのであります。なるほど難問ですね。

レベルも国情も違いますが、大勢の門下生を先生が一同に教示するというと、私達はずぐ教育問題を考えます。それも年令によりけりですが、私などは昔の昔の中学や高校の頃をすぐ回顧するのです。でも、その頃その時の成績と進路や立身出世などは全く一致するはずもないですね。これは、家や学校にどれだけどんな本があるか、家庭環境がどうで



あったのか、生徒と先生の相性もあり、学校での科目の好き嫌いにもよるからです。

私は小学生の頃から、家にあった沢山の宗教書などには目もくれず、『天文と宇宙』『星空の世界』なんていう本を耽読していたからか、そんな事を六〇代後半に前立腺肥大の手術をした時（一九九七年九月）に都内大病院の処置室で、たまたま東大名誉教授で前東京天文台長（三鷹）の北村正俊先生と処置室で同席し、小学校の時のお話をした所、先生はそれならば天文学を専攻すればよかったと言われましたが、その時はもう大分手遅れでした。

また高校に入った当初、私は最も成績が良かったのは数学でした。テストは毎回一〇〇点、一度だけは一二〇点を貰いました。でも最も大切な三年の時の物理・化学が大嫌い。言語障害のある先生で声がよく聞き取れなかったからです。その代わり最も得意だったのは国語。特に本もろくに読まなかったのに、文語文法などはすぐにピンと分かります。ですから辛辣な宮下という先生がおられて、どんどん皆に当てますが、誰も正解がないと最後に「それでは椎名」で「落ち」になりました。とはいえ、私は特に優秀な大学に入っ

た訳でも何でもありません。唐代の禪門では間違いを犯すと眉がゴツソリと落ちるというのが常識でしたから、現代よりよほど禪修行は難関だったのであります。さて冗語冗談の最後に宏智さんの頌古を学びましょう。

〔頌 古〕

頌に云く、賊となる心、〔贓物、已に露わる〕人に過ぎたる膽、〔傍若無人〕歴歴縦横と機感に對す。〔白拈は巧偷なり〕保福・雲門は也た垂鼻脣を欺き、〔探頭は太だ過い〕翠巖・長慶は也た脩眉眼に映る。〔佯つて知らざるを打ねす〕杜禪和、何の限りか有らん。〔天童の杜撰は万松と何似か〕剛いて道う、意句一齊に刻ると。〔隠さんと欲さば彌露わる〕自己を埋没して、氣を飲め聲を吞む。〔子を養えど父に及ばざれば〕先宗を帶累して、牆に面い板を擔う。〔家門は一世に衰う。〕

いや、七言八句の律詩はむつかしいですね。詩句が何のたとえなのか知らない。さっぱり分かりません。白拈は白拈賊で盜賊のこと、ここでは令參のことを讃嘆した語です。令參が謙遜して罪過で眉毛がゲツソリ落ちたかと言ったので、盜人や盜品などがぞろぞろ出てくるのです。〔面牆擔板〕は『尚書』とい

う五經中の一つ。中国始まって以来の帝王の言行録で、「人は学問をしなければ牆垣に向つて見ている」ようなもの、つまり何も見えないことのむつかしい表現。どうせ何も見えないならば、面壁の坐の方が分かりやすいですね。

挿絵のはなし

椎名老師による『明珠』への「從容錄に学ぶ」掲載ですが、第五号（昭62）から今に至るまで、右頁にもある味わい深い挿絵が入っております。

この絵の作者は、大塚洞外という曹洞宗の禪僧です。長らく修行を積んだ後、大衆への禪の普及を發願し、『從容錄百画餅』と題した書を著しました。

この書は、一則ごとに「解説文」と「絵」が見開き頁で見ることができ、分かりやすい工夫がなされています。絵はシンプルな墨絵で、実に人間らしさがイキイキと描かれております。

大正末期の発行ですが、宗門の貫主や他高僧による揮毫の書が多数掲載されており、仏教界挙げて高い評価をしていたようです。誠に貴重な絵です。

《特別企画》

私が最も感銘を受けた言葉

長い人生の歩みの中で
最も心の奥底にズシン
と響いた一言を問うて
みた。果たして如何に。

「自灯明」

流山市 市川 洋介

「自灯明」は、私が『涅槃経』を読んだ時に目にした言葉です。よく「法灯明」と合わせて説かれます。

最初はこれに対して「自分を信じる」などの通俗的な解釈をしてしまいましたが、調べてみるとイメージとかなり違っており興味を惹かれました。經典の続きには四念処が説かれてるように、これら二つの言葉は、身心や感受、ものごとに対して常に自覚的になることを意味するようです。分かりやすく言えば「自分をしっかりと見据える」といった感じでしょうか。

私は一つの事柄に夢中になると他が見えなくなりがちなのでこれを知ってからは考え事に没頭している時などには別の感覚を意識し

てみるなどの実践をしています。明らかな変化は感じませんが、やっている時は確かに僅かな安堵感があります。

感情についても同じことが言えます。怒っている時に実は少し相手に慢を抱いて喜悅していたり、喜んだと思ったらそれを失うことに不安を覚えたりなど。確かに「本心」という言葉はありますが、その周辺の思いについても見逃さないようにすると、新たな発見があります。

ただ、それが禅の実践とも即すかどうかは分かりません。禅師によってはもしかしたら、心に調伏を加えるのは見当違いだと一蹴されるようなことかもしれません。ですがこういった、心（認識）が明晰である方がよいという考え方は個人的には新鮮に映りました。今後はこのことを更に点検して、自灯明の内実を見極めていこうと思います。

「心不可得」

柏市 岡本 匡房

「体は治そうと努力している。ところが、『治らないという心』が、それを妨げている」。これは禅の高僧の言葉ではない。町の接骨医の言葉である。

小さいころから、病気がちだった。最近、足の打撲で運動ができず、糖尿病が悪化。「もう治らないかも」という弱気の心がそれを増幅している気がする。

このような弱い心は小さい時からだった。この時、父から聞いた言葉が「心不可得」だった。「過去、現在、未来に渡って心は存在しない」というのが本来の意味のようだがこんな話もある。禅の高僧が迷う弟子に「迷う心を取り出せ。治してやる」といった。だが、存在しない心を取り出せるわけがない。弟子はそれで悟ったという。父はこの故事に倣い、子供の弱気をなくそうとしたが、小生には難しかった。

そこで、仕事が一段落した五〇代になって、治そうと「坐禅」を始めた。いわば典型的「ため坐禅」だった。が、いざ、病気になる、「弱気の心」はなくならず、まったく効果は

なかった。

テレビで『サザエさん』をみた。先生が『将来の夢』を考えろ」との問題を出す。カツオ君が父の波平さんに「お父さんの夢は」と聞く。「もう夢はない」と思っていた高齡の波平は答えられない。ところが、近くの夫婦が仲良く歩いているのを見て「いまの平和で平凡な家庭こそ夢」と悟る。いわば、「心」が落ち着いている生活こそ「心不可得」ならぬ「心可得」というわけ。まさに正反対の解釈だが、こちらの方がなにか「心」が安心する。

「今、ここ、自分」という禪語もある。「先のことは考えず、現在に全力を尽くせ」という言葉だ。まさに、波平さんと同じ。これが病気を治すポイントかもしれない。

「君たちは星のかげらだよ」

柏市 杉浦 上太郎

この言葉は『宇宙の風に聴く』という本のサブタイトルです。著者は宇宙物理学者の佐治晴夫先生です。

この本は四〇年ほど前に、知人から頂いたもの。この本を手に取り、「君たちは星のかげらだよ」の一句に接したとき、その瞬時に



ん中にどつかと坐り続けております。

この本は、我々のルーツの起源は一五〇億年前のビックバンによって宇宙に散らばった星のカケラによって生成された。宇宙全体の質量全体は不変であって、常に何かに変化し続け、生れては滅し、滅しては生じる。故に人間は死んでもなくなるならない、元素として地球や宇宙にばらまかれ、やがて何かに変化し存在し続けるという。圧巻は、宇宙には意志があつて、自身の存在を客観的に見てほしくて、「人間」という存在を生み出したと説いていることです。

その数年前、私はサラリーマン人生で中盤にあつて、ストレスの固まり人間でした。そんな折に、永平寺の一泊坐禅体験を経、その後、椎名老師と出会い入門を願ひ出しました。

自然と一体化している仏教のダイナミズムさに感じ入っていた頃、この本と出会い、衝

“そうか、やはりそうか”と大得心を得、それ依頼、私の心の真

撃的な大得心を得たのです。やがて我が家の近くに東京大学柏の葉キャンパス、宇宙線研究所（小柴・梶田教授輩出）ができ、更に宇宙との縁の深まりを感じております。

宇宙規模で思考すると人間の悩みなど、とるに足らない如何にちっぽけなことか。生涯の「安心」を得た言葉のご披露までにて。

「和を以て貴しとなす」

柏市 松井 隆

この言葉は、私の人生の礎としてきた言葉です。また日本人の思想の根底をなす立派な言葉だとも思います。

「以和為貴」は、聖徳太子が制定した一七条憲法第一条に記された言葉で、元はと言えば、論語での孔子と弟子とのやり取りの中の言葉のようです。そして、当時の中国や日本では人々が協調して生業が上手く進むとした文化が育んでいたように思われます。

また、お釈迦様の教えにおいても左右対立ではなく、中道を歩むようにお示しになつて仏教の根底が成り立っている様です。

さて、このところ国の内外共に不安状況が続いています。ウクライナや中近東の戦争も

しかり、アメリカ新大統領トランプ氏の考えは、論語の言葉とはまったく逆です。全てがアメリカファストで、アメリカが良くなれば他はどうでも良いという身勝手な考えで、貿易の関税を盾に世界中が振り回される様な混乱が生じるのではないかと危惧されています。また、日本でも闇バイトと称する憂慮すべき凶悪な犯罪が頻発しています。このような状況は世界や日本で今後どのようなものか不安が付きません。

私が会社勤めの頃は、会社を伸ばす目標を達成するには、チームワークや団結を重んじて、良い仕事の結果順調に伸び、社員的生活も豊かになったように思います。

また、日本は度重なる地震や台風等に見回れ、能登の災害等では多くのボランティアがお手伝いに駆け付け、被災者に感謝されるようになりました。正しく「和を以て貴しとなす」との考えが人々に広く浸透しているように強く感じます。

年齢が高んできたせいか、争いごととは避けなければならぬと強く感ずる昨今、ウクライナや中近東の戦争が早く終わって平和になり、人間が尊厳される時代の到来を祈って、私の選んだ言葉といたします。

合掌

「一寸の虫にも五分の魂」

我孫子市 小畑 二郎

この言葉が私の印象に残ったのは、五〇年も前に、宇野弘蔵先生の経済学に関するエッセイを読んだ時だったように記憶しています。先生は、その中で、外国人や日本人の権威ある学説を金科玉条として、それに追従して、先生の学説を否定する学者たちに向けて、この言葉を振り向けていました。つまり、自分は、まだ浅学の身であるが、真理の探求のために力を尽くしている。自分で考える力を持っているのだから、自分の考えを表明する機会を持つても良いのではないか。これに対して自分を批判する人たちは、自分の考えを持たずに、単に権威ある人の意見に従っているだけではないのか。私にも、五分の魂があるのだから、それを踏みつぶさないでほしい。たぶん宇野先生は、そのように言いたかったに違いない。

私は、これまでこの言葉に表わされている考え方を自分の学問研究の指針としてきました。通説や権威ある説に追従して、自分の考えを曲げたり、やたら人の意見を引用して、自分の考えを飾り立てたりしないで、自分の

頭で考え、自分の言葉で語ること、このように心がけてきました。

参禅会で修行し、また学んできた今となつては、ここで言われている「五分の魂」とは、「仏性」という言葉に言い換えてもよいのではないかと、思うようになりました。つまり、生きとし生けるもの、どんなに小さな虫けらであっても「五分の魂」はあるし、その魂を尊重しなければならない。どんなに卑しいとされている人たちでも、仏になる可能性がある。その可能性を實現できるかどうかは、それぞれの人々の修行に掛かっている。だから自分も「五分の魂」を大切にしよう。そう思うようになりました。

⑧

さらに世界に目を広げるならば、すべての生きとし生けるものの「五分の魂」を尊重するところから民主主義や人権を尊重する平和が始まるのではないのでしょうか。残念ながら、現在世界の指導的立場にある人たちは、ほとんどこのような考え方から遠ざかっているように思います。そして、最近のニュースは、反対の傾向が優勢になっていることを伝えていきます。しかし、それだからこそ、これからも「五分の魂」を大切に、出来る限り仕事を続けていこうと思っています。



第四二回「成道会」円成す



第四二回成道会が二月八日(日)、一〇名の参加者によって開催されました。成道会の機縁は、お釈迦さまが二月八日に、菩提樹の下で明けの明星をご覧になられお悟りを開かれたことにあります。爾来仏門では二月八日を「成道会」と称した報恩感謝の大法要を営んでおります。

龍泉院参禅会では、毎年、二月の二、八日の間の日曜日に開催することを決めております。今年は丁度八日が該当日でした。

午前九時から坐禅堂において、報恩の坐禅を二炷結んだ後、本堂にて成道会の法要を修養いたしました。差定は左記のとおりです。

- 一、殿鍾三会 大衆入堂
- 一、七下鍾 導師上殿 一同合掌
- 一、拈香法語 導師が成道を讃えて漢文で述べる言葉
- 一、普同三拝 導師と共に一同三拝
- 一、般若心経 一同唱和
- 一、回 向 維那読み上げ
- 一、普同三拝 導師と共に一同三拝

次いで、恒例の「問答」です。「問答」の所作については、明石方丈様のご指導によって逐次改められております。

問答のトップバッターは、杉浦さんが問答の仕方の模範を示しながら問いかけます。

問、「被団協がノーベル平和賞を授与されたが、これを契機とした核廃絶・戦争撲滅運動の機運が生まれないことを不思議に思う。世界に先駆け仏教界挙げて取り組まれたら如何か」。

答、「個々が努力精進して取り組んでください」

次いで岡本さんから

問、「日々心が千々に乱れます。どのように行動したらよいのでしょうか」

答、「難しく考えることはありません、調身・調息・調心に心掛けることです」

次いで五十嵐から

問、「東葛地区の佛法は如何」

答、「東葛地区の佛法は、花は紅、柳は緑。引き続き継承・発展させて行くべきです」

次いで小畑(二)さんから

問、「『生死の中に仏あれば生死なし』の意は



問う河本さんと答える明石方丈様

如何」

答、「ふだんから精一杯生きること、そしていつ死が訪れてもよいようにこころがけておくことです」

次いで河本さんから

問、「小畑節朗さんが体調を崩されています。どのような言葉を掛けたらよいのでしょうか」

答、「引き続き療養し、特別なことをしなくて、平常心で過ごされるようにお伝えください」

最後は、坂牧さんの問答にて終了となりました

た。

引き続き明石方丈様の有難い法話を拝聴いたしました。ご法話は『正法眼蔵』『菩提薩埵四摂法』に説かれている「利行一法なり」についてでした。

利行（人を利するおこない、利他行）とは、自分の得も他の得も一つなのである。真の利行は、自分も他も普く利益するということです。

利行は人間の社会ばかりでなく植物の社会でも見えます。植物間で競争するよりも、助け合って行く方が生き延びる可能性が高いことだと思います。

「菩提薩埵四摂法」には同事についても説かれています。同事というは不違なり、自にも不違なり、侘にも不違なりとあります。自他共に相違がないということです。司馬遼太郎さんが小学校の教科書のために書き下ろした『二一世紀に生きる君たちへ』にも、同事に似たような考えが述べられています。

この後、本堂の片付けを行い、小畑前代表からの添菜と龍泉院様からの来年のカレンダーをいただいで散会となりました。

（報告…五十嵐嗣郎）

柏駅にて肅々と行ず

12月

「歳末助け合い托鉢」

去る十二月十五日（日）、今年も恒例の歳末助け合い募金活動を実施いたしました。

当日は、まことに穏やかな絶好の托鉢日和の快晴となりました。

午後〇時三〇分に長全寺様へ集合。

参加者は明石方丈様の他、杉浦氏、五十嵐氏、河本氏、齋藤氏、吉澤の計六名でした。

長全寺様本堂前にて般若心経をお唱えした後、同寺山門から二列縦隊にて柏駅東口コンコース上へと移動いたしました。午後一時頃より、所定場所にて活動開始となりました。個人的なことですが、今年は少人数ということもあり、明石住職の傍で募金活動を行うことができました。

これまででは、少しでも募金を集めて世の中に役に立つのであればと思い、駅前を行きかう方々へ呼びかけをしていました。

ただ、この活動も本来は修行の一環ということであれば、それもいかなものかということもあり、今年は静かに立ち続けることと



托鉢中の明石方丈様(右)と五十嵐さん

いたしました。

今年も河本さんのお孫さん達、参禅会員の坂巻郁子さんも喜捨にいらつしやいました。

当初は穏やかだった気候も、日が傾くにつれ寒さが増してきます。午後三時に活動を終了。長全寺様へ戻りました。長全寺様の休憩所で茶菓の御接待に与りました。温かいお茶は冷えた体に染みわたる格別な一杯でした。

こうして、無事今年の歳末助け合い托鉢が終了いたしました。

募金額は二九、六四六円で、朝日新聞厚生文化事業団へ寄付いたしました。

（報告…吉澤誠）

明石方丈様の祈禱太鼓



雲一つない晴天の一月二八日、龍泉院様の年初の大事「初不動」が行われました。明石導師のもと、一五名の参加者（檀家様一二名、参禅会会員三名）にて実施。明石方丈様による大迫力の祈禱太鼓から始まりです。

「般若心経、その他経文」を唱えながら大音響が堂内一杯に響き渡ります。クライマックスは明石方丈様が、裂帛（れきぱく）の気合と共に短刀を振り、降

堂内に迫力満ちる

「初不動」挙行す

1月

魔退散を行い、様々な災いに遇わない祈禱が厳修されました。

祈禱後、明石方丈様より「私らしくない行いをしていないか常に自問自答することが大事である」とのお諭しを賜りました。

全て終了後、「福引」「記念品授与」が行われ、無事円成となりました。（報告：杉浦）

報恩感謝で肅々と

「涅槃会」円成す

2月

めつきり春めいてきた穏やかな二月一五日、明石導師のもと参禅会会員一二名にて「涅槃会」が肅々と厳修されました。

堂内に飾られた大きな「釈迦涅槃図」が、その日であることを象徴しています。

明石方丈様の「拈香法語」のお唱えに続き、「般若心経」「舍利礼文」の誦誦、「回向文」の読み上げの順で進み法要を終えました。

その後、明石方丈様の「法話」不安とどう向き合うか」を拝聴しました。

日常、困難なことが起きたときどう対処するか、逃げるか、挑戦するか。失敗しても挑

明石方丈様の法話を拝聴する



戦する方が得るものが大きい。修行の中に悟りあり、迷いあり。自分の方から悟りに近づくのは迷いであり、大いに迷っても悟りの方から近づくこともある。果敢に努力することが肝心であるとお諭しい

いただきました。大変勇気づけられる法話であり、ただただ有難く思い感謝申し上げます。

この度も、小畑節朗さんからの添菜（和菓）子を有難く頂戴いたしました。

最後に、「釈迦涅槃図」の収納と坐禅堂回りの清掃をして円成となりました。（杉浦）

近況



東堂
椎名 宏雄 頓首

昨年末から本年始めにかけては、大変な修行の連続でした。

昨臘は冬至の日に新型コロナ感染に懸り、施設の担当医師から一〇日間の軟禁状態が要請され、部屋から一步の出入りも許されず、氷枕での養生。専ら微熱と疲倦状態に対処する為、食事は廊下の内外に分けられ、風呂はダメ、別棟からの家内も入れず、新聞も見られず、元々テレビもラジオもないので世間の動向は全く無知。オセチも一切れも口にしない初体験の元日でした。

でも有難いですね。数年前に納筆した賀状はむしろ多く拝領し、高額のお見舞金、高価な物品の送付に接するなど、それも九州・北陸・東北などの遠方からが多く、私は一体何という果報者かと深く

顧み、有縁の方々には合掌し感謝感激であります。

感染の消えた昨今も、まだその有難き傾向は続き、最近虫損した虫歯で一週間の極刻食の食事にも完全に復旧し、一月二五日の天神様の日には、あの東京巢鴨こ

贈られた 啓翁桜 (山形)



と高岩寺 来馬先生の肝煎りで、日本一早咲きの「啓翁桜」一束が私宛に届け

られました。間もなく開花してこのホーム内の患者・従業員・来客の皆様方を和ませて下さるでしょう。

私もこのホームに来て一年半に過ぎませんが、すでに地方史の本三冊と専門書三冊(一冊はあと一、二カ月で完成)を刊行し、今は下記記載の『従容録に学ぶ』の出版に全力投球をしています。

皆様、何といっても健康が資本です、重ねて健康にはくれぐれもご留意され、共によき年にいたしましょう。

～『従容録に学ぶ』単行本出版決まる！～

龍泉院参禅会会報『明珠』の第二号(昭和六〇年一〇月発行)から、永らく掲載してきました『従容録に学ぶ』の記事が、この度、京都の仏教書店では最大の法蔵館から刊行されることとなります。

尤もこれは全百則のうち、椎名が元気な間に掲載したのは七〇則であり、三〇則は未掲載でした。

このたび、その未掲載部分を補い、全体を再点検して順序や記述を改訂し、これに新たに解説や索引なども付すことといたしました。全体的には、椎名の永い仏教者としての生きざまと、これも永い研究体験に裏付けられた、一般者から学究者までの利用に耐えられる読み物にと企図しています。

まだ原稿が漸く仕上がり、今後様々な肉付けが必要ですが、有志の方々のご助力によって、何とか仕上げてゆく予定です。

龍泉院の四季の花

(三)

坂牧 郁子

令和六年の梅雨入りは、平年と比べ二週間程遅く始まり、明けは七月中旬、感覚としては短い感じでした。

六月、この時期は、やはり紫陽花です。六地藏堂裏には額紫陽花、雲堂の横は額紫陽花や白花、青花が見事に列をなしています。雲堂の裏手は青一色で、海の波のように続く年もあります。が、花のつき方は、剪定の時期や剪り方によるのでしょうか。今年は残念ながら、波のようにはありませんでした。お墓の周囲は白、ピンク、青の花々が、お墓を守るように見事な花つきでした。

夏椿（沙羅）も、この時期に純白な花をつ

雲堂横の紫陽花



三角山の山百合



けます。六地藏堂裏には、大きな夏椿があり、散り落ちて、地面を白く敷きつめるのは、風情があつて、掃除をしない、手を加えない事に感謝です。大悲殿前にも有り、こちらは枝の繁りが整備されているので、一輪一輪確かです。

七月、酷暑であつたり、豪雨であつたり、異常を感じる事の多い月でした。

一六日、山百合の見頃になりました。裏山から四株移植され、三角山でも見られるようになりました。ここ五十年程、七月一六日は見頃となり、私の中では山百合記念日です。やぶかんぞうは観音像の近くと、六地藏堂裏手

に、大きな橙色の花をつけます。

八月、お盆近くになり、大悲殿前に白花の百日紅が、目線の高さ程でたわわです。紅花の百日紅は、宝蔵の手前の左右に一本ずつ、高い位置であてやかです。又、あちらこちらに台湾百合が、ポツリポツリと咲き、清楚な感じを漂わせます。台湾百合は驚く程の種を宿し、風に吹かれて飛んでゆきます。多くの幸運を得た種が、翌年発芽し、一輪の花を咲かせます。球根は残り、年を経る毎に一本に咲く花の数を増やします。幸運の分だけ開花するような気がします。

大悲殿前の百日紅



和漢朗詠集下巻、無常の頃に
“年々歳々花相似 歳々年々人不同”
とあります。四季の花々を見続けて、心から
感じ入っています。

(完)

想つこつ

ある禅僧の四つの誓願

我孫子市 清水 秀男

いろんなひとがいるけれども 今日一日やさしい心でしよう／いろんなことがあるけれども 今日一日 あかるい心でしよう／この道は遠いけれども 今日一日 一歩すすもう／何があっても大丈夫 今日一日 笑顔でいよう

この言葉は禅僧 西村宗斎師の四つの誓願です。西村師は茶の湯ゆかりの京都の禅刹大徳寺で修行され、兵庫県たつの市の寶林寺の住職でした。寶林寺は、大徳寺開山である大燈国師の生誕地を記念するため建立され、境内には大燈国師産湯の井戸が残っています。西村師は二〇一八年に末期スキルス性胃ガンの宣告を受け、二〇二〇年に満五八歳の若さで遷化されました。

上記言葉は、死の前日の法話の一節の言葉で、最期は自らの意志で坐禅をした姿で、師を慕う多くの人に見守られて、息を引き取られたのです（坐脱）。この誓願はガン宣告を

受けた時に、「明日のことはわからない。でも、今は生きている。これは絶対間違いない。じやあ、この今日をどう生きるか」と考え、一切比べる事はやめようと決意されました。元氣な頃と比べない。他人と自分を比べない。昨日と今日を比べない。今日と明日と比べない。今日一日、「今、ここ」の私を一所懸命に生きる。そして作られたのが四つの誓願です。この誓願のポイントは「今日一日」です。

今日一日で思い出すのは江戸時代の禅僧 正受老人の「一大事と申すは、今日只今の心也。それをおろそかにして翌日あることなし」の言葉です。翌日あるかどうか分からないのに、明日あると思うから今日を疎かにする。どんなに苦しい事でも、一日の事だと思えば耐えられるし、楽しい事でも一日の事だと思えばそれに溺れる事もない。人生で一番大切な事は、時は命、今日一日を粗末にせず、今を精一杯生ききる事だとのお示しです。「日は好日」に通じます。

西村師はまさに正受老人の言葉を体現されておられます。今日一日をキーワードにして、すべての人にやさしい心で。良い事も苦しい事もあるが明るいい心で。自分の目指す道は遙か彼方であるがそれに向けて今日一歩前進し

よう。そして比べない生き方をすれば何があっても大丈夫。そして今日一日笑顔で過ごそう。それが幸せへの道だと説いておられると思います。また、今を生きるとは、今日こうして出会えたご縁に感謝し、雨降るも風吹くもよし、昨日も今日も明日もよし、如何なる状況でもすべてをそのまま、ありのままに受け入れて生きる事だとも語っておられます。不治の病に冒されながらも、末期の瞬間まで「今、ここ」に徹する生き方をされたと言えるでしょう。

八二歳を迎える今年、老いや度重なる病によつて肉体の自由は奪われつつありますが、西村師の生き様に学び、精神・心の自由まで奪われることなきよう勉めていきたいと思っています。朝目を覚まし、生かされている事に感謝し、与えられた今の状況を素直に受け止め、比べることをやめる事。そして好奇心を失うことなく、目標を持ち、それに向けて一歩でも前進し、「今・ここ」二度と戻らぬ一日を丁寧に、人にはやさしく、笑顔を絶やさず、老いを楽しみながら過ごし、夜は安心して眠りにつく事が出来る日々の積み重ねが出来ればと。言うは易く、行ふは難いですが、只ひたすらに。

追悼

畏友 中原悦雄さん

白井市 佐藤 修平

昨年七月二六日、中原さんが急逝されました。龍泉院参禅会にとつて、とりわけ作務班の仲間にとつて痛恨の極みの一事です。心よりご冥福をお祈りいたします。

その存在感の大きさに比べ、彼の参禅会歴は五年と三カ月間と決して長くはありません。しかし、定例会、自由参禅、作務奉仕に積極的に参加され、上山回数には年間六〇回を大きく超えていました。作務でのパワフルな動きには目を見張るものがあり、大きなブルーシートに山と積まれた剪定後の樹木を、力強く裏山まで運ぶ姿が目には浮かびます。施食会や記念行事に来山される、多くの参加者で混雑する駐車場の整理のため、境内に第一P、第五Pまでの詳細な地図を作製されたのは中原さんでした。

中原さんが初めて龍泉院に上がられたのは、二〇一九年四月八日の降誕会です。同じ白井市在住の新会員入会をとっても嬉しく感じましたのです。コロナ拡大直前、二〇二〇年二月の

新年会に初参加された中原さんは、我孫子の会場まで車で来られ、私の隣席で酒を控えられつつ、周りの人達と談笑されていました。帰路、ほろ酔いの私を自宅まで送ってくれ、その途次、車中でいろいろな話をしました。

奄美大島の出身（私は真逆の北海道出身）、関西系の大手流通会社で仕事をされ、マネージメントの苦労を味わったことなど。私が二〇年ほど前に、元ちとせの「島唄」を聴いて魂が震えたことを話すと、静かにうなずいておられました。趣味も本格的に追究されたようです。ヘラブナ釣りは年季が入り道具一式も高級品を揃えられ、その一部を見せてもらいました。ヘラブナ釣りに興味のあつた私に伝授してもらう計画もありました。ご逝去後、焼香に訪問した際には、自宅に多くの油絵が飾られ、その素人離れした腕前に驚嘆し、また、多種多様な花々の記録を綿密に筆記されたノートも拝見しました。

昨晩秋、松井さんと臨時作務を重ねました。眼前の仕事量の多さに思わず二人で「中原さん、早く戻ってきて〜」と声をあげました。あの愛くるしい目の笑顔で、中原さんが応えました「無理せん」といって。

合掌

中原悦雄さんの

お別れを悔やむ

柏市 松井 隆

龍泉院参禅会入会五年生の中原さんは、純真に坐禅に励み、参禅会の行事に参加し、作務の仕事等に打ち込んでおられ「定例の作務以外の臨時作務にもぜひ参加したい」とのメールを頂き、寺の境内が広く、裏山や墓回り等多くの作業できる人は大歓迎との、私と中原さんの思いで、臨時作務を毎週一回位実施。その思いは「お寺はいつも綺麗でありたい」との共通認識でした。その思いを実践していたその矢先、昨年の夏の暑い一日でした。

作務を終えて駐車場で中原さんと別れた時でした。その時中原さんは体に異変を感じ取って、そのまま帰らぬ人となられたとの、その後の警察の方の話でした。

本当にあつけない中原さんとの別れになりました。あれ程元気に、熱心に作務に取り組んでおられたのに、正しく世の無常・人生の儚さをひしひしと感じ、残された私共への激励の思しめしと察知します。あの夏の日を偲びつつ、中原さんの末永いご冥福をお祈りして追悼の言葉といたします。

合掌

沼南雜記

令和六年

【定例参禅会・年間行事】

(一) 内は座談の司会者
*氏名は敬称略

- 九月二日 一名
(小畑二郎・岡本匡房)
- 一〇月二七日 一名
(小畑二郎・岡本匡房)
- 十一月二四日 一名
(小畑二郎・岡本匡房)

龍泉院参禅会簡介

【参 禅】

一、定例参禅会

- ・日時 毎月第四日曜九時(初参加は八時半) 来山、正午解散
- ・坐 禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

- ・提 唱 (坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

- ・座 談 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

- ・自由参禅 自己紹介・喫茶・座談

- ・日時 毎月第一日曜日と第二土曜日

- ・坐 禅 九時から一〇時半まで(入堂九時まで、退堂自由)

※会費なし、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

- 一、一日接心 本年は六月一日、四炷の坐禅と提唱等

- 一、成道会 本年は二月七日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

- 一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、降誕会(四月八日)、施食会(八月一六日)、歳末助け合い托鉢(二月一四日)、

- 一、作 務 団体参禅受け入れ、歳末煤払い(二月定例参禅会後)

- 一、作 務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

- 一、『明珠』 年二回発行(①四月八日・②一〇月五日発行)

- 一、『口宣』 年一回発行

【ウェブサイト】

<http://www.rusenin.org/> 『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます。

―成道会―

- 二月八日 四名
(小畑二郎・岡本匡房)

―歳末助け合い托鉢―

- 二月一五日 六名
(明石住職・五十嵐嗣郎)

- 二月二二日 一名
(小畑二郎・岡本匡房)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二三日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月二六日 一名
(河本健治・齋藤正好)

- 二月一五日 一名
(河本健治・齋藤正好)

【編集後記】

▼小畑元代表の断つての願いで、『明珠』の最初に連載されている「從容録に学ぶ」が京都の法蔵館から出版されることになりました。

▼これまで七四則分が掲載されましたが、残り二六則分は既に椎名老師が脱稿されましたので、杉浦さんと二人でテキスト化しました。

▼老師から追加原稿や見直しもあり第一側から第百則まで並べての編集作業に没頭中です。

▼毎月例参禅会では、坐禅後明石方丈様の「正法眼蔵」のご提唱をいつもありがたく拝聴しております。

▼また、ご経験に基づいた様々なお話も大変興味深く拝聴しております。

▼私もほぼ同年代ですが、示唆に富んだお話を伺うたびに感銘を受けるばかりです。これまでの人生の積み重ねが差となって表れていると痛切に感じます。自分も懸命に精進していきたいと思っています。

▼明石方丈様に機会あるごとに「法話」を賜る。みな少し努力すれば実践可能なこと。実に有難いお示し。

▼この度椎名老師の玉稿『從容録に学ぶ』の単行本化は、まさに快哉也。

▼独創的意訳ルビと禅僧の日常生活記が面白く椎名イズム躍如。出版社が通勤電車の中でも読めるものにした

▼と意気込む由縁はここにあるう。

▼坂牧郁子さんの好評連載「龍泉院の四季の花」は完結。感謝です。(宏済)

▼幹 事 河本 健治
々 会計兼務 齋藤 正好

龍泉院

参禅会会報

八三号

● ● 発
印 行
刷 / 天徳山龍泉院
株式会社秋元印刷 千葉県柏市中央一―一八
04 (7191)
2316

「坐禅」体験のおすすめ ～「椅子坐禅」もできます～



ときに、本物の坐禅堂に坐り、自己とじっくり向き合ってみてはいかがでしょうか。坐禅の作法等は、ご指導いたします。

・坐禅体験の申し込み

ホームページ(<http://www.ryusenin.org/>)

電話(広報担当・五十嵐)080-6571-4154

・体験日:巻末頁の「簡介」に記載の定例参禅会か自由参禅のどちらかでどうぞ。

龍泉院参禅会